

卷 頭 言

身延山久遠寺中興の祖と仰がれる、身延山第十一世行学院日朝（一四二二〜一五〇〇）の第五百遠忌法要が昨年の六月二十五日、久遠寺において厳修された。この日朝の五百遠忌の年に華を添えるかのように、第五十二回「日蓮宗教学研究発表大会」が、当番校である身延山大学において十一月四・五の兩日にわたり開催された。総勢四十二名の方々の御発表と大会関係者の御協力により、充実した発表大会を閉じることが出来ました事に対し、先ずは紙面をお借りして深く感謝申し上げる次第であります。

この度の発表大会では、日朝の五百遠忌を記念して標題〈行学院日朝上人の研究〉のもと、身延山大学学長・浅井圓道、立正大学教授・冠 賢一、同・北川前肇、身延山大学講師・望月真澄、の四氏に発表を願ひ、さらに、シンポジウムにおいて色々な質問と意見が討議され、参加者全員が納得し深く感銘を受けた。この様な形の特別発表の真の狙いは、日朝をあらゆる角度から照射することによって、少しでも日朝の実像に近ずき知って行こうとする姿勢のなにもでもない。

日朝が活躍した室町前期は、日蓮聖人入滅後百数十年にして、ようやく全国的に発展を遂げていた時期で、教団の教線拡張の主力は関西方面に移っていた観を強くする時でもあった。とりわけ京四条の妙顯寺・六条の本国寺を二大拠点として展開し、各門流ともに分離独立が成されていた。それが故に、宗門史上においては目覚ましい活躍をした、幾多の高僧を輩出する結果ともなったのである。すなわち、日像の四条門流からは龍華院日実（一三一八〜一三七八）により妙覺寺が、仏性院日慶（一三九七〜一

四七八)は妙蓮寺を、慶林坊日隆(一三八五〜一四六〇)は本能寺、常不輕院日真(一四四四〜一五二八)は本隆寺を創建しそれぞれが分立していった。六条門流からは円光日陣(一三三九〜一四一九)が本禅寺を、中山門流においては玄妙日什(一三二四〜一三九一)が妙満寺を開創して独立し、さらに久遠成院日親(一四〇七〜一四八八)は本法寺を創立して分立した。以上のごとく、まさに各門流が分立伸張していったのである。なかでも特筆すべきは日隆である。

日隆は法華宗(本門流)、本門仏立宗、本門法華宗、その他八品門流系の祖と仰がれる人物である。日隆は十才で得度、十八才のとき四条妙頭寺日霽の門に入ったが、日霽遷化の後、後住月明の化儀・化法の乱れを諫言し出寺した。そのご叡山、三井、高野の諸宗をはじめ、教団の碩学を訪ねて学んだ。永享元年(一四二九)、京の豪商小袖屋宗句の請いをうけて本応寺を創し、同年『法華天台両宗勝劣抄』を洛中の各派諸山に廻達した。その内容は本迹勝劣・本門八品上行所伝の宗要を闡明にした点にあった。したがって本迹一致を説く身延山とは対立した。日隆の著述は日顕の『御聖教目録』によると三百数十巻が記録され、尼崎本興寺に格護されている。古来より身延の学匠日朝と比肩され、「東朝西隆」といわれている。

東西の双壁といわれる日朝は、東国に生まれ東国で活躍し、東国身延山で示寂した。身延在職三十八年の間の活躍は三点に集約する事が出来る。(一)には、西谷の狭隘に点在していた久遠寺の諸堂宇を現在地に移し、規模を一新した事。(二)には、身延山の年中・月行事の制度を定め、諸種の法則はっせきを奠定し確立した事。(三)には、日蓮聖人の遺文『録内』『録外』を蒐集書写し、その注釈を遂げた事、等々である。

さらに教学面においては当時の中古天台教学を撰取して、本迹一致教学の組織に努めた事は重要である。また当時の仏教・各宗の教学、その学の広さは当代一流の学匠であった。それ故に著述も膨大である。古来より約六十部七百五十余巻と伝えられ、「身延文庫」所蔵は約六百巻を数える。

身延山では日朝五百遠忌を機に、身延文庫所蔵の約六百巻をマイクロフィルムに写し収め、現在、典籍目録を作成中である。同時に、この目録の出版によって新たに日朝研究が発見することを期すものがある。

本号は第三号に引き続き、日朝の五百遠忌特集とさせて頂いた。なお日蓮教学研究発表大会において御発表下さった本学の二名の方の論稿と、身延山の伝説・口碑の論稿も合せて掲載させて頂いた。一つは、国語学・言語学の面にも期待されるものであり、二つは、眼病守護の神様として絶大な信仰をあつめる「日朝信仰」の諸形態を論じたものである。

最後に、本特集号をもって日朝上人に報謝し、新たな日朝研究に踏みだす事を研究所一同が誓い、結びとしたい。

平成十二年二月二十五日

身延山大学東洋文化研究所長

宮 川 了 篤 識